

発表論文「シークエンシャルな空間の記述法に関する研究

- 金刀比羅宮の参道空間を事例として -

発表者 村瀬慶征

講評者 1. 宮武慎一

どのような研究か

近代の都市計画が普遍性や合理性、経済性を追求してきたことによって都市が人間にとってさまざまな空間体験のできない画一的なものとなっている。

これらに対して、豊かな空間体験を伴うシークエンスの構成要素を分析することで、変化に乏しい都市の中に大きな変更を伴わず、少しでも魅力ある空間体験を盛り込むことが実現するのではないか。本研究は空間を動的状態から捉えるシークエンス的観点から、より豊かな空間体験を建築、都市に盛り込むことを目的とした研究である。

香川県の金刀比羅宮を事例として、ローレンス・ハルプリンの行った「MOTATION」記述方による分析・評価と、宮脇壇「デザイン・サーベイ」の分析・評価を元に新たな空間の記述法を模索した。

研究によって得られたこととその意義

L・ハルプリンの「MOTATION」記述方による分析・評価では金刀比羅宮の美しいシークエンスを作り出している構成要素いくつかのシンボルに分け、単純化することで、連続シーンを切り取り、ヴィジュアルに記述することができている。しかし、村瀬自身も記述しているようにそこには難解さが付きまとう上、シンボルの決定においても本当に客観性があるのかどうかは疑問である。宮脇壇「デザイン・サーベイ」の分析・評価では照度の変化や勾配の変化が明快に示されているが多くは単純化、記号化を進めるあまり、読みとりがあまりに難解である。

感想

都市の中で歩いていて画一的でつまらない、魅力を感じることでできない空間がたくさんある。それらを改善することは非常に意義のあることであり、重要である。

美しく、魅力的なシークエンスが実現されている空間における構成要素を分析することで都市に新たな動的要素を組み込もうという考え方が非常に面白かった。

僕自身は美術館や博物館などにおいて建築導線の重要性に興味があり、それは単純に動線処理だけの問題でなくシークエンスの問題とも非常に深く関わってくると思う。

問題は講評会のときに重村先生も言っていたことだが、コンテキストを読みとり構成要素を単純化、シンボル化し、分析することはできるが、それらが記号化された後、元の状態に戻すことは不可能である。また、時間や分析者の気分や感情にも左右される一回性のそれらにどのように客観性を持たせ、生かしていくのが、非常に難しいところである。

また、要素が増えていくことで単純化したはずの記述がより難解で、読みとりが困難であることも問題である。(評者/宮武慎一)